

「認知症を知る講演会～”その人らしさ”はなくなるらない～」

令和8年6月9日

- 1 日 時 令和8年6月8日(月) 13時30分～16時
- 2 会 場 広島市(広島県医師会館ホール)
- 3 講 演 「新しい認知症観～脳科学から見た認知症～」脳科学者 恩蔵 絢子
「認知症とともに生きる」認知症当事者 丹野 智文
特別対談 ～講師2人による～

4 概 要

- ① (恩蔵絢子) 同居する母親が2015年65歳でアルツハイマー型認知症と診断され2023年に死亡、認知症の母親と同居し様々な生活の現場、行動や症状に接しながらその経験をもとに、娘としての立場と脳科学者としての視点を交え認知症を考察し情報を発信している。
- ② 高齢者の精神的健康は重要な社会課題であり、身体の衰えとともに、配偶者の死、退職、身体機能の低下、孤立など社会的変化と密接に関連しており、認知症など複雑な形で表れ、認知症は単なる記憶障害だけでなく、様々な精神障害を伴うことが多く心の救急の対象となる場合も多い。
- ③ 認知症の人が生活する上で直面する、同じことを何度でも聞いてくる、受診の話をすると怒り出す、同じものをいくつも買ってしまふ、認知症の人はなぜ家に帰りたがるのか、などの困りごとがあり、家族や介護職がどうかかわればよいのか模索しながら認知症の人に寄り添う姿勢が必要である。
- ④ (丹野智文) 自動車会社に勤務していた2013年、39歳でアルツハイマー型認知症と診断され、同社に勤めながら元気になるための企画・仕組みづくりに取り組んでいる。認知症だから、認知症になったからできる仕事がある、をモットーにこれまで日々生きている。
- ⑤ 認知症当事者がアルツハイマーになり家族とともに過ごす時間が増え、多くの優しさに触れ合い、認知症イコール終わりではない。認知症を悔やむことなく認知症とともに生きる、認知症になっても周りの環境さえよければ、楽しく笑顔で過ごせ失敗しながら自信を持って行動する、失敗しても怒らない環境が認知症当事者には必要。
- ⑥ 認知症と診断されることを恐れ病院へ行きたがらない人もたくさんおり、楽しい人生を再構築するためには早期診断が必要で、人生は認知症になっても新しく作ることができ、認知症は決して恥ずかしい病気ではなく、誰もがなる病気で、みんなで支え合う人間社会を作ることが重要である。
- ⑦ (特別対談) 認知症の進行は本当に病気だけのせい、と思われがちであるが、周囲の人の間違った対応や環境が影響することが多く、日々を楽しく過ごすことで認知症進行の不安を軽減するヒントをつかむことができ、これからの認知症の人へのケアにつなげる必要がある。
- ⑧ ピアサポートの考え方を大切にすること、それは認知症の人と共通すること、対等であることを大事にすることで、認知症の人生に直面しそれを互いに理解し、同じ立場や課題を経験してきたことを生かす、仲間として支えることが重要であり、このような地域社会づくりが必要である。

5 所 感

- ① かつて認知症は痴ほう症と呼ばれていたように、偏見と差別、社会からの孤立や疎外、無理解があり、このことが症状をさらに悪化させる要因にもなっていた。この講演のように医師に加え脳科学者、認知症当事者の経験に基づく提言など、これまでとは進化した認知症への理解とそれを受け入れる地域をつくる、地域文化を広める必要がある。
- ② 認知症発症の疑いがある場合、初期段階のとき家族としてどうするのか、私たちに何ができるのか、支援する側、される側という立場を超え、すべての人が認知症とともに当たり前前に生きる地域社会づくりが必要であり、地域福祉、協働のまちづくりとも一体となって、認知症政策を進める必要がある、この先自治体政策の大きな柱となる。
- ③ 認知症基本法は令和6年に施行され、国では認知症施策推進基本計画が策定され、各自治体でも認知症施策推進計画の策定作業が本格化している。誰もが安心して認知症になれる地域づくりをどう進めていくのか、このことが自治体政策に問われている。浜田市は令和元年「浜田市認知症の人にやさしいまちづくり条例」を制定しているが、認知症施策推進計画はまだ策定されていない。
- ④ 浜田市は認知症サポーター養成講座を実施してきており、約8,000人の認知症サポーターが養成されているが、その後の情報提供や支援や集まりなどもなく、活動がないのが現実で形骸化している。市の高齢者福祉計画では認知症地域支援推進員を配置し、認知症活動支援を行う支援チーム、チームオレンジを全市に広げるとしているが、現在その数は2にとどまっている。